



## 一貫コース通信

### スキー教室を終えて

今回のスキー教室は、前日に福島県でまん延防止重点措置の適用が确实視されたため、宿泊をしない日程に組み直し、「日帰り2日間」というこれまでにない形での実施となった。前日にこのことを告げられた生徒たちは大変がっかりした表情を見せたが、初日のゲレンデではあっという間に笑顔の表情に変わり、改めてスキーというスポーツ、そして自然体験が大きなパワーを持っていることを認識した。

この日程変更に伴い、準備していたことの半分近くが実施できなかった。その中で、今回初の試みであった「震災講話」は、次回こそ実施できればと思っている。一見、スキーと何の関係もないように感じるかもしれないが、福島の貴重な観光資源であるスキー場も未だ復興の道半ばの状況にある。この講話を東日本大震災での教訓について改めて学ぶ機会、そして福島や東北の復興についても一度考える機会にさせたい。このまま地球が割れるかもしれないとすら思った地震、様々な物を飲み込みたくさんの命と生活を奪った津波、活動制限や未だに避難生活を強いられている原発事故・・・当たり前だが、震災が「実体験」として残っていない子どもたちが年々増えていく。その中で、実際に体験した人の言葉や心に触れることは、今後とても大切な機会になっていくと思うからだ。

東日本大震災が発生するまでは、私の中では「震災」といえば、27年前の阪神・淡路大震災であった。関連死を含め6,000人以上の尊い命が犠牲となった。当時、私は小学校低学年で、学校に行く前に朝食を摂りながらこの事態をテレビで知ることになった。これが日本で起きていることなのかさえ分からなかったが、テレビ画面が地震直後の火災で真っ赤に染まっていたことだけは今でもはっきり覚えている。それから少し経ってから、学校で推薦図書案内が配布され、「ドッカンぐらぐら」という兵庫県の児童作文集を親に購入してもらった。その本を読んで、ようやくこの震災の怖さや悲惨さを感じるようになった。同世代の人たちがこんな目に遭っていたのか、こんな怖い思いをしていたのかということを知り、幼いながらの頭で想像を巡らせた。

「経験に勝るものはない」という言葉があるが、全くその通りだと思う。私自身、自らの体験や経験で得た知識や考え方を一つの基準にしているし、自分の人生を今よりも充実させるために、選り好みせずに、より多くの経験をしていきたい。思えば、一貫コースの学校行事も「できないよりはできたほうがよい」「経験して初めて、楽しさや難しさが理解できる」ということがベースになっている。一方で、「実体験」には劣るとしても、経験していないことに想像を巡らせたり思いを馳せたりすることで、それを自身の「疑似体験」として学びを得ることもできるはずである。読書や講話、ニュースや新聞などでもそれができると思う。そのようなものから「知識」だけでなく、「人の思い」なども感じ取り、感じ取ったことを心の隅っこにでも残しておいてほしいと思う。

